

R5 総括コメント (美術学部)

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
日本画	教授	岡田 眞治	長久手合戦図屏風をアド街ツク天国にて取り上げていただいて、宣伝になった。
日本画	教授	井手 康人	院展の審査、研究会は充実した内容にすることが出来た。科研も積極的に行い、来年度の発展に向けて青柳正規元文化庁長官に御協力して頂ける体制を整えることが出来た。
日本画	教授	清水 由朗	本年度の計画及び目標については、現在進行中の計画を含め、ほぼ達成した。
日本画	准教授	吉村 佳洋	日本画の制作研究においては個展や公募展への発表を通し、自身の研究内容を客観的に考察する事が出来た。 今回の反省点を今後の制作にも活かせるよう研究を重ねたいと考える。
日本画	准教授	岩永 てるみ	研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献共に当初立てた自己の計画を概ね達成出来たと考える。
日本画	准教授	阪野 智啓	今年度の一番の成果は、科研における研究発表もかねた京都工芸繊維大学美術工芸資料館における展示とシンポジウム開催を主導し、実現できたことである。2015年以来続けてきたやまと絵屏風に関わる研究の中間総括ともなり、また関係する研究者へ情報発信もできシンポジウムで議論できたことは貴重な機会だった。
油画	教授	阿野 義久	退任する年度であり、研究の成果を退任展という形で成果を示すことが出来た。担当授業においても大学院美術研究科修士、博士在学学生中心に積極的に取り組むことが出来た。
油画	教授	倉地 久	研究・教育・運営・社会貢献に対して、バランスよく自身が努力し本務を遂行できたと考えている。特に、副学長・教研審メンバーとして、大学運営と業務に昨年より努力できたと考えている。
油画	教授	額田 宣彦	・研究活動～目標を達成、研究を深めることができた。・教育活動～ゼミ、作品講評会、討論会、レクチャー等を全学年に渡り実施。学生の自主性、思考力、実践力を育てた。学生研究アトリエが狭く拡張の必要性を感じた。・大学運営～当初計画より業務が大幅に増加しストレスを感じた。特に長寿命計画工事では美術学部建物全体を中心に担当することになり時間を取られ研究活動に支障があった。次年度は研究とのバランスを可能であれば配慮したい。・社会貢献～「GROUND4」企画検討。記録集助成金取得（日東財団）。
油画	教授	井出 創太郎	2008年より継続する腐蝕銅版画を基軸としたプロジェクト『落石計画』はコロナ禍を鑑みて2年間実施を見合わせたが、昨年度における継続するための現地調査・研究活動を経て、本年度において『第13期「落石計画」銅版画試論Ⅲ-ときをつかむ ときのかりか-』展を実施し、本格的な再開とすることができた。また、『落石計画』と同様に、研究活動と共に教育活動としても位置付ける『光射す器/種蔵の影』展（岐阜県飛騨市種蔵集落）は3年目を迎え、継続するプロジェクトとして大きな成果を上げることができた。井出研究室の主軸となる事業であり授業である両プロジェクトは充実した年度となった。一方で研究室が継続参画しているMEGIHOUSE（香川県高松市女木島）での活動については、研究室所属の大学院生が「個展」を開催するなど、大きな成果をあげる年度となったが、次年度に向けて学生の動向を踏まえた検討が必要である。
油画	教授	高橋 信行	サンフランシスコでの個展、アートラボあいちでのグループ展と積極的に研究発表を行った。 さらには2024年4月に東京で開催される個展に向けた制作と、研究活動の充実が見られた。
油画	教授	白河 宗利	創作研究においては、韓国ソウルで2つの企画展覧会「Anatomy of Refleclyion and Floatation」（Gallery Soyeun）、「VERY ORIENTAL THINGS」（G CONTEMPORARY）等に出品し、専門である絵画の技法材料研究の新たな知見や成果が上がった。その一方で、美術館から依頼を受けた受託研究や外部から依頼された業務、大学運営の比重が大きくなりすぎている感がある。来年度からは学長職となるため、ワークバランスを取りながら進めていく必要がある。
油画	准教授	増田 直人	計画した研究活動、社会貢献は実行 満足出来る。

油画	准教授	大崎 宣之	研究では個展/グループ展での作品発表（8件/国内7・海外1）や現代版画シンポジウムのパネリストとしての登壇など、これまでの活動がつながった年度となった。大学運営では工房委員長および広報委員として、また、社会貢献活動として「ART OSAKA 2023」内での企画されたトークイベントに出演など充実した活動をおこなった。
油画	准教授	猪狩 雅則	学生委員では近年増えてきている不安定な精神状態のフォローなど継続して検討が必要だと改めて感じた。学生のストレスのない環境をイメージし適宜発言をおこなうことができ、委員会運営に参加できてきたと感じている。専攻運営に関しては、専攻会議などで発言を積極的に行い授業や専攻運営に関われたように思う。学生の指導は、相変わらず難しさを感じているが、学生の特性を見極めながら、対応できてきたように思う。
油画	准教授	安藤 正子	研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献の全てに於いて、全力で取り組みました。来年度以降も引き続き積極的に取り組みたいと思います。
油画	准教授	平川 祐樹	総じて、大きく飛躍の年となった。引き続き研究制作・教育活動共に精力的に行っていきたい。
油画	准教授	横山 奈美	本年度、自身の研究室から、初めての修了生を輩出することができた。2年間にわたり、研究室の学生たちとの関わりを通じて、研究制作活動へのサポート方法を模索する期間であった。自身の研究活動、教育への取り組み、並びに大学運営に関わる業務は、すべてが学生の学習環境の充実に貢献していると認識を新たにした一年であった。
彫刻	教授	神田 每実	日程の重複等の理由においてやむなく断念せざるを得ない場合を除いて、当初の計画の殆どを実施することが出来たことについては、一定の前向きな評価を与えたいと考える。また、学外授業を含む学外におけるプログラムの展開やそれらへの参加は、様々な体験を参加学生に与え、広い視野の獲得に効果的であると思われるため、さらに活発な取り組みが継続性を持って行われることが重要であると考えます。
彫刻	教授	中谷 聡	教育活動及び大学運営に積極的に取り組むことができた。さらに、本学サテライトギャラリーSA・KURAと茅野市民館にて、退任記念展を開催し、本学卒業生、在学生はもとより、多くの一般来場者の皆さんと、芸術文化全般についてディスカッションすると共に、これまでの研究活動のまとめをすることができた。また、地方の美術館の要請に応じて、作品展を開き、ギャラリートークやワークショップを行い、愛知県立芸術大学の教員として、地域社会における芸術文化の向上に、微力ながら寄与することができたことは大きな成果であった。
彫刻	教授	高橋 伸行	専攻教員一丸となって検討を進めてきた新しい専攻棟が2023年11月に完成し、2024年4月からスタートする新しいカリキュラムの設計や実施シミュレーションなどの準備に追われる1年であった。それは60年近くの彫刻専攻の継承してきたことの一つ一つを見直し、それを礎にこれからの20年、30年を考え抜くことでもあった。大学院では、芸術学の学生と彫刻の学生が参加する授業が実現でき研修を行うなど、専門性を越えた交流が生まれたことは大きな成果である。
彫刻	准教授	竹内 孝和	教育活動、大学運営、社会貢献は概ね良好な結果が得られたと思われる。研究活動のアーティスト・イン・レジデンスでは現地の作家と密なコミュニケーションを取ることができ、またいくつかの展覧会を開催する事が出来た。今後も様々な試作や素材研究を行い、チャレンジ精神に富んだ作品制作を行い学生に向けても刺激のある表現を模索したい。
彫刻	准教授	森北 伸	令和5年度の初旬に定めた目標を概ね達成出来ました。
彫刻	准教授	村尾 里奈	今年度は、筆者が企画した「彫刻家森克彦展／翼果の帰郷展」を古川美術館爲三郎記念館で開催しました。本学の卒業生も多く出品したこの展覧会は、彫刻の多様性を体現する14人の彫刻家によるもので、多くの方に観ていただきました。大学運営では、令和6年度の新棟への移転準備として、金工房の準備、新カリキュラム、新教員体制の構築に取り組みました。研究活動では、近年の展覧会企画における実践内容をまとめた「空間表現の実践と検証—令和4年度に企画した3つのグループ展を中心に—」と題した論文を紀要に投稿しました。
芸術学	教授	小西 信之	芸術資料館館長兼社会連携センター副委員長という初めての管理職及び専攻主任、教務委員会を始めとする多数の委員会の仕事は、容赦無く研究時間を削ぎ、今年は自分の研究が思うように進まなかった。次年度はもっと研究に時間が割けるよう、鋭意工夫と努力をしたいと思う。とりあえず無事大きな問題もなく専攻を運営できたのは良かったと思う。

芸術学	准教授	本田 光子	今年度は全ての面において着実な成果を出すことができた。科研および民間助成による研究課題はいずれも少しずつ形になり始め、展覧会などに貢献することができた。芸術学専攻は少ない教員数ながら、教育・業務の面で長期的に安定した運営ができるよう工夫を重ねた。社会貢献面ではいよいよ『西尾市史 美術・工芸編』が刊行される。ここで得た知見を教育へも還元したい。
芸術学	准教授	金子 智太郎	専攻内の業務や多くの委員会に携わり、教育・研究環境の改善に尽力した。また、芸術講座やイベントの開催などを通じて、学外との交流も図ることができた。反省すべき点はあるが、おおむね目標を達成できた。
デザイン	教授	水津 功	<p>【研究分野】</p> <p>(1) 高齢者福祉施設の理想型を模索する「共進化のデザイン」研究は、特養の改修計画において実践的な仮説検証を推進中。</p> <p>(2) 芸術教育と起業教育の類似から着想した「アートアントレ」を、本学大学生、非芸術系大学生、高校生において実践的検証を行った。</p> <p>(3) 日本の森林問題への取り組みから生まれた特定バイオマス（針葉樹材）燃料薪ストーブのライフスタイル展開と、欧州進出を目標としたブランディング計画を本学春田准教授の協力を得て推進した。</p> <p>(4) 景観研究においては、碧南市と長久手市の景観計画策定の骨子となった「景観とステークホルダーの関係図」を元に、市民活動の具体的方策を検討した。</p> <p>【教育分野】</p> <p>(1) アートアントレのコンセプトを軸に、本学大学生、非芸術系大学生、高校生を対象に授業プログラムを実施し、有効性や問題の抽出を試みた。</p> <p>(2) 従来のデザイン分野を撤廃した実技授業スタイルを本年から実施した。抽象的テーマに対し全方位のデザインアプローチから取り組める実技課題では、自分の関心の持ち方や個性ある気付きが大きな第一歩となる。この深度を深める為の自己理解を促進する教育プロセスが特徴である。</p> <p>【社会貢献分野】</p> <p>(1) 協定を結んでいる尾張旭市の三郷駅前まち育てプロジェクトは3年目を迎え、名古屋学院大学の三矢准教授らとともに、駅前再開発に対する市民の主体的な参加を支援、駅前再開発基本計画への提言を行った。</p> <p>(2) 愛知県が主催し本学が企画実施する環境デザイン夏季講座が25年目を迎えた。愛知県内750名の行政担当者がこの講座を受講したことになる。</p> <p>(3) みよし市の緑と景観計画の策定に貢献した。R6年4月発行予定</p> <p>(4) 尾張旭市から市政功労者として表彰された。</p>
デザイン	教授	柴崎 幸次	ドイツ・パッサウでの展覧会は好評であった。科研費関連の顕微鏡の整備などが実現し現在稼働している。
デザイン	教授	佐藤 直樹	令和5年度は「大学運営」の分野における業務負担と責任が大きく増加した。大学の健全な運営のために尽力した、という自負はあるが、その分「研究活動」「教育活動」「社会貢献」が疎かになることはなかったかという自省を含めて、4項目の適切なバランスを図りながら次年度の計画を検討・立案していく所存である。
デザイン	教授	本田 敬	社会連携授業（学部2年、3年）では、より実践的な形で教育活動が行え、なおかつ地域や企業に対して、大学ならではの提案や関わりの連携が図れた点は今年度大きな成果となった。地域企業との製品開発や共同研究も実行に移すことができ、来年度以降につながる取り組みが実行できた。
デザイン	准教授	夏目 知道	研究活動・教育活動・大学運営・社会貢献、全体的に積極的に取り組むことができた。施設整備委員長として大学施設の整備に取り組んだ。
デザイン	准教授	春田 登紀雄	本年度は2つの教育プログラムを開発し活用しています。1つ目は、アントレプレナーシップを育むアイディエーションメソッドを高校生や他大学で展開しました。もう1つは、小学生向けのサーキュラーエコミーの体験型教材です。豊田市の小学校の家庭科の授業で活用していただきました。来年度は、対象者の裾野を拡大し、起業家態度の育成や環境分野での教育活動に貢献していきます。
デザイン	講師	望月 未来	教育活動では学部4年生5名の卒業制作を主担当しました。従来よりもメンバーが増えたことで研究室での対話量が増え、私自身デザインの思考を深めることができた一年でした。

デザイン	講師	和 祐里	<p>[教育活動] 担当授業の内容を全て新たに構築する必要があったが、1年間学生とコミュニケーションをとる中でそれぞれの成長を実感することができた。[大学運営] デザイン専攻展、卒業修了制作展に関わる広報物に携わり、多くのメンバーと協力をしながら魅力的な制作物をつくることができた。[社会貢献] 社会連携プロジェクトでは美術学部と音楽学部の学生たちの表現を学外へ発信することに貢献した。</p>
陶磁	教授	梅本 孝征	<p>年度を通して研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献において、成果を得ることが出来た。 特に教育活動における継続的成果として陶磁専攻「芸術表現コース」の課題として古川美術館との産学連携事業が挙げられる。</p>
陶磁	教授	長井 千春	<p>今年度も美術学部長として大学運営全般に尽力した。全学カリキュラム委員会を設置し、全学的にカリキュラムの見直しに取り組んだ。また、陶磁分野の教育において博士後期課程の学生5名を指導した。うち3年生2名が本審査に臨み、各学位申請論文は博士基準を満たすものと審査員に評価され、学位が授与が確定した。学部では韓国の協定校との教育交流、3年生の学外研修を台湾で実施することができた。</p>
陶磁	教授	崔 幸熏	<p>研究活動・教育活動・大学運営・社会貢献全てにおいて積極に取り組んだ一年でした。特に制作研究と発表において、「Suikao」、「MAYU」、「MUSUBI」、「Torre」などインテリアオブジェとしての花器を制作し、国内外で展示発表やコンペに出展することができた。薪窯焼成や下絵転写、サンドブラスト、カー塗装など様々な加飾表現を研究し制作する姿勢を見せることで学生たちの制作意欲を惹き立たすことができました。教育活動においては、韓国ソウル科学技術大学との交流事業の一環として陶磁専攻を代表して特別講演を行いました。また3年目となる「デザインシンキング」授業にミニワークショップを取り入れるなど常に内容と質を高めることができました。陶磁専攻のある大学交流展の企画として進めてきた蔦屋書店代官山での展示交流について詳細内容を固め、実施に向けて動き始めました。学生たち本人が制作した作品が生活空間でどのように展示され、生活者はどう感じるのかをLIXILショールーム名古屋と連携、学生主導で展示企画・開催する仕組みを作り、実践的学びの機会をつくりました。好評のため今後継続的に取り組むこととなりました。社会貢献として産学連携プロジェクトやコンペ、国際交流などにも積極的に取り組むことができました。以上のことを踏まえて更にステップアップしていきたいと思えます。</p>
陶磁	准教授	田上 知之介	<p>計画していた研究活動を実践することができました。今後は、より社会性を意識した研究活動に注力していきます。また教育活動においては、国際交流事業や産学官連携事業など、学外での活動に積極的に取り組みました。多様な視点を取り入れながら丁寧な指導を行い、質の高い教育成果を出すことが出来ました。</p>
陶磁	准教授	佐藤 文子	<p>令和5年度の計画に沿って各事項ともに積極的な取り組みを行うことができた。特に研究活動においては、二国間交流事業として現地へ渡航し研究を進めることができた。研究制作活動としては、素材への可能性を模索することができ、陶芸教育の取り組みと陶磁器における色彩や原料素材についての研究を行うことができた。次年度においても引き続き、陶磁原料や釉薬分析による多岐にわたる陶芸表現の可能性を探求していきたい。</p>
陶磁	准教授	小枝 真人	<p>研究活動・社会貢献においては積極的に取り組む事が出来、概ね良好な成果を得た。とくに研究活動においては数多くの展覧会での発表が出来、積極的に取り組み概ね良好な成果を得た。 次年度は教育活動において、より専門的な教育出来る様、今年度以上に他大学の陶磁教育機関などと連携協力して陶芸教育の可能性を模索していきたい。 また、ワークショップの開催など社会に向けた研究活動から新たな学びを積極的に取り入れたい。</p>
メディア映像	教授	石井 晴雄	<p>学生と長久手市の子育て支援ツールのデザインを行い、地域社会との連携と社会貢献を行うとともに、学生もより実践的な制作を通して、スキルアップと視野の拡大、対話力の向上が達成できたと思う。</p>
メディア映像	教授	森 真弓	<p>今年度は、昨年度に引き続き、社会及び地域連携を含めた社会貢献活動と、実際の教育プログラムへの反映を行った。また、大学院開設に向けての準備に関わる活動に尽力した。</p>

メディア映像	准教授	有持 旭	昨年度、作品制作・研究に集中した結果、今年度はそれらを国内外の社会で発表する機会に恵まれ、12つの国際映画祭で上映することができ、そのうちの一つで最優秀アニメーション賞を受賞するに至った。同時に、昨年度イェール大学（アメリカ）で研究した内容を基にアニメーション制作を行ってきた。来年度も継続する。また、芸術講座や学外委員や審査員などを介し、まだ新しいメディア映像専攻の広報活動に繋げることができたと感じており、総じて実りある1年であった。
メディア映像	准教授	池田 泰教	当初の計画を不足なく実行することができ、その成果は『glow-in progress』展（2023 11.17-29 新宿眼科画廊）や、日本映像学会中部支部研究会(2023 12.17 名古屋学芸大学)等で積極的に行うことができた。また地方のアートセンターと協働した『ドキュメンタリースタディーズvol.2』(2023 7.23 鴨江アートセンター)では、規模は小さくとも専門性を持った特徴ある会を継続することによって国内外の関係者・研究者にも認知されるようになり、質の高い議論の場を作ることができた。
教養	教授	清道 正嗣	研究については、成果が十分とは言えなかった。教育活動については、予算削減に伴う非常勤講師担当授業を代替するための準備が必要となり、十分以上に取り組んだ。また大学運営においても十分な取り組みであった。総じて、十分な取り組みと成果であったと言える。
教養	教授	石垣 享	研究活動では、目標を大きく上回る結果となった。特に、全国大会の大会長を務め、成功に導けたことは大きな結果であった。また、名古屋大学との共同研究として常滑市教育委員会の活動を手助けし、名古屋大学でのワークショップでの講師を務めた。教育活動は、安全管理を徹底して行い、大学運営では、積極的に活動を行った。
教養	准教授	数森 寛子	教育活動においては、授業の履修者一人ひとりの学習進度と関心を常に把握するよう心がけ、それぞれの目標達成に向けて指導を行った。研究活動については、『愛知県立芸術大学紀要』（第53号）に論文を投稿した他、国際シンポジウム「文学と汎神論」（於：中京大学、3月10日）に参加し研究発表を行った。